

日蓮大聖人御書全集

みよういちによごへんじ

妙一女御返事

じりじょうぶつしよう

(事理成仏抄)

みょういちにょご へんじ じりじょうぶつしょう
妙一女御返事（事理成仏抄）

こうあん

ねん

がつ

にち

さい

みょういちにょ

弘安 3年 ('80)

10月 5日

59歳

妙一女

去ぬる七月 中旬の比、真言・法華の即身成仏の法門、

大体註し進らせ候いしその後は、一定法華經の即身成仏

を御用い候らん。さなく候いては、当世の人々の意得

時候無得道の即身成仏なるべし。不審なり。先日書いて進

らせ候いし法門、能く心を留めて御覽あるべし。

その上、即身成仏と申す法門は、世流布の学者は皆

一大事とたしなみ申すことにて候ぞ。なかんずく予が

いちだいじ

嗜

もう

そうろう

よ

うえ

そくしんじょうぶつ

もう

ほうもん

よう

ほうもん

みな

もんてい

ばんじ

差

置

いちじ

こころ

とど

門弟は、万事をさしおきてこの一事に心を留むべきなり。

けんちょうごねん

いまこうあんさんねん

いた

にじゅうしちねん

あいだ

建長五年より今弘安三年に至るまで二十七年の間、

ざいざいしょしょ

もうの

ほうもんはんた

せん

在々処々にして申し宣べたる法門繁多なりといえども、詮

いちず

ずるところは、ただこの一途なり。

せけん がくしゃ なか しんごんけ た

そくしんじょうぶつ

しゃくそん

世間の学者の中に真言家に立てたる即身成仏は、釈尊

と

しみさんきょう

しょうにゆう

だいにちきょうとう

の説くところの四味三教に接入口したる大日經等の

さんぶきょう

べつきょう

ぼさつ ジゅしきかんじょう

しごく

そくしんじょうぶつとう

三部經に、別教の菩薩の授職灌頂を至極の即身成仏等と

おも

しちい なか

じゅうえこう

ぼさつ

かんぎじ しょうとく

思う。これは、七位の中の十回向の菩薩の歡喜地を証得せ

ていたらく

まつた

えんきょう

そくしんじょうぶつ

ほうもん

る為体なり、全く円教の即身成仏の法門にあらず。た

きょうもん

由 ののし

かんぎぎょうしようしようと うえ え

うえ え

とい経文にあるよしを罰るとも、歓喜行証得の上に得た

くどく さた ぶんさい

るところの功德を沙汰する分齊にてあるなり。これ十地の

ぼさつ いんぶん しょぎょう

じゅううじ とうがく

かぶん し

菩薩の因分の所行にして、十地・等覺は果分を知らず。

えんきょう こころ

うば

ろくそく

なか

みようじ

かんぎょう

円教の心をもつて奪つていえば、六即の中の名字・觀行

いちねん おな あた

い とき

かんぎょうそく

じりわゆう

の一念に同じ。与えて云う時は、觀行即の事理和融にして、

りえそうおう かんぎょう よ

理慧相応の觀行に及ばず。あるいは菩提心論の文により、

だいにちきょう

さんぶ もん

そくしんじょうぶつ

あるいは大日經の三部の文によれども、即身成仏にこそ

しょうじんとくにん

い 寄

ほうもん

あらざらめ。生身得忍にだにも云いよせざる法門なり。

せけん

ひとびと

ぼだいしんろん

しんごん

ほう

なか

されば、世間の人々は、菩提心論の「ただ真言の法の中に

のみ」の文に落とされて、即身成仏は真言宗に限ると思え
り。これによつて、正しく即身成仏を説き給いたる法華經
をば「戯論」等云々。止觀の五に云わく「たとい世を厭う者
も下劣の乗を翫び、枝葉に攀附し、狗の作務に狎れ、獮猴
を敬つて帝釈となし、瓦礫を崇めてこれ明珠なりとす。
この黒闇の人、あに道を論ずべけんや」等云々、この意な
るべし。歎かわしきかな、華嚴・真言・法相の学者、いた
ずらにいとまをつけやし、即身成仏の法門をたつることよ。
夫れ、まず法華經の即身成仏の法門は、竜女を証拠と

そ

ほけきょう

そくしんじょうぶつ

ほうもん

りゅうにょ

しょうこ

もん　お

そくしんじょうぶつ

とううんぬん

かぎ　おも

まさ

そくしんじょうぶつ

たま

ほけきょう

けろん　とううんぬん

しかん　ご　い

いと　もの

げれつ　じょう　もてあそ

しよう　はんぶ

いぬ　さ　む

みこう

うやま　たいしゃく

がりやく　あが

みょうじゅ

こくあん

ひと

どう　ろん

とううんぬん

こころ

なげ

けごん　しんごん

ほつそう　がくしゃ

暇

費

そくしんじょうぶつ

ほうもん　立

そくしんじょうぶつ　しんごんしゅう　かぎ　おも

だいばほん

い

しゅゆ

あいだ

すなわ

しょうがく

すべし。提婆品に云わく「須臾の頃において、便ち正覚

じょう

とううんぬん

ないし

へん

なんし

な

を成す」等云々。乃至「変じて男子と成る」。また云わく

すなわ

なんぽう

むくせかい

ゆ

うんぬん

でんぎょうだいしい

のうけ

「即ち南方の無垢世界に往く」云々。伝教大師云わく「能化

りゆうによ

りやつこう

ぎょうな

しょけ

しゅじょう

りやつこう

な

の竜女に歴劫の行無く、所化の衆生もまた歴劫無し。

のうけ

しょけ

りやつこうな

みようほうきようりき

そくしんじょうぶつ

な

能化・所化ともに歴劫無し。妙法経力もて即身成仏す

等云々。

ほけきょう

そくしんじょうぶつ

にしゅ

しゃくもん

りぐ

また法華経の即身成仏に二種あり。迹門は理具の

そくしんじょうぶつ

ほんもん

じ

そくしんじょうぶつ

そくしんじょうぶつ

いま

ほんもん

そくしんじょうぶつ

即身成仏、本門は事の即身成仏なり。今、本門の即身成仏

とういすなわ

みよう

ほんぬ

あらた

だん

は「当位即ち妙なり。本有にして改めず」と断ずるなれ

ば、肉身をそのまま本有無作の三身如来と云える、これなり。この法門は一代諸教の中に入れ無し。文句に云わく「諸教の中においてこれを秘して伝えず」等云々。

また、法華経の弘まらせ給うべき時に二度有り。いわゆる、在世と末法となり。修行にまた二意有り。仏世は純円一実、滅後末法の今の時は一向本門の弘まらせ給うべき時なり。迹門の弘まらせ給うべき時は、すでに過ぎて二百余年になり、天台・伝教こそ、その能弘の人にてましまし候いしかども、それも、はや入滅し給いぬ。日蓮は、

今、時を得たり。あにこの所囑の本門を弘めざらんや。本迹
しょぞく ほんもん ひろ
いま とき え

二門は、機も法も時も遙かに各別なり。

問うて云わく、日蓮ばかりこのことを知るや。

答えて云わく「天親・竜樹、内に鑑みるに冷然たり」等
てんしん りゅうじゅ うち かんが
うんぬん てんだいだいしい

云々。天台大師云わく「後の五百歳、遠く妙道に沾わん」。
うんぬん てんだいだいしい のち ごひやくさい とお みょうどう うるお

伝教大師云わく「正像やや過ぎ已わつて、末法はなはだ近
きに有り。法華一乗の機、今正しくこれその時なり。何を
もつてか知ることを得る。安樂行品に云わく『末世の法滅
まつせ ほうめつ なに ちか

きに有り。法華一乗の機、今正しくこれその時なり。何を
もつてか知ることを得る。安樂行品に云わく『末世の法滅
まつせ ほうめつ なに ちか

せん時』と云々。これらの論師・人師、末法鬪諍堅固の時、
とき うんぬん ろんじ にんし まつぱうとうじょううけんご とき

にもん とき はる おののおのべつ
こた い にちれん

じゅしゅつげん たま

ほんもん たま

ほんもん

かんじん

なんみょうほうれんげきよう ひろ

地涌出現し給いて本門の肝心たる南無妙法蓮華経の弘ま

らせ給うべき時を知つて、恋いさせ給いて、かくのごとき

たも

とき し

こ

たま

釈を設けさせ給いぬ。

そくしんじょうぶつ

しゃくもん

のうにゅう

もん

ほんもん

なおなお即身成仏とは、迹門は能入の門、本門は

しゃくもん

のうにゅう

もん

ほんもん

即身成仏の所詮の実義なり。迹門にして得道せる人々、

じつぎ

ほんもんじゅりようほん

種類種・相対種の成仏、いずれもその実義は本門寿量品に

かぎ

かんねん

たま

じょうがん

限れば、常にかく觀念し給え。正觀なるべし。

じょうだい

ひとびと

そくしんじょうぶつ

しかるに、さばかりの上代の人々だにも即身成仏には

と

わざら

たま

取り煩わせ給いしに、女人の身として度々かくのごとく

たびたび

み

たま

によいん

法門を尋ねさせ給うことは、ひとえに只事にあらず。教主

か。また憍曇弥女の二度来れるか。知らず、御身はたちま

ちに五障の雲晴れて、寂光の覚月を詠め給うべし。委細は

またまた申すべく候。

弘安三年十月五日

日蓮 花押

妙一女御返事